

雄勝地域の

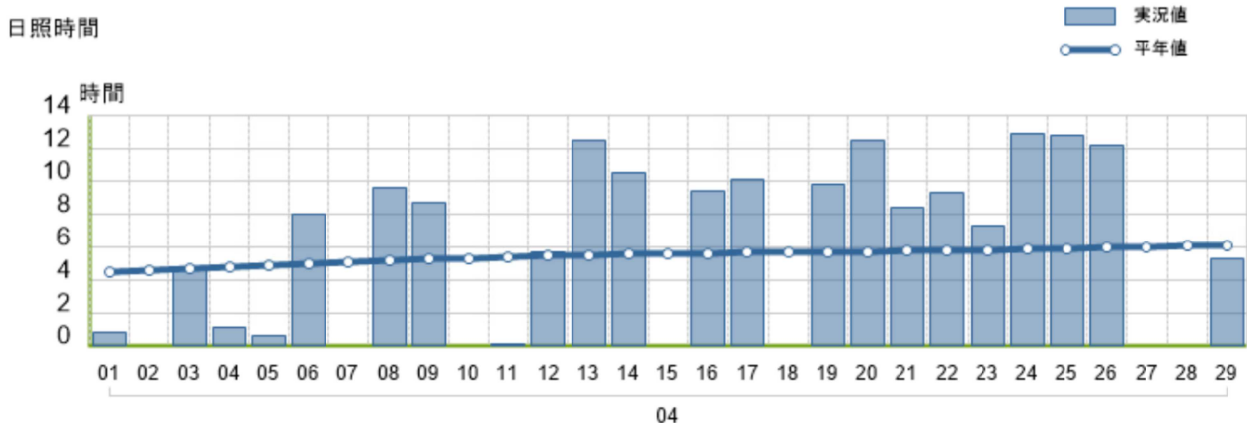
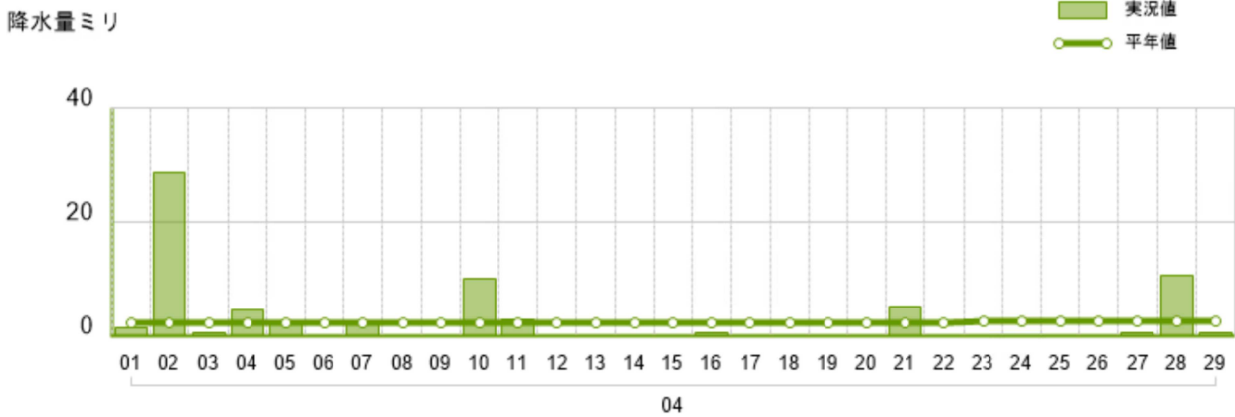
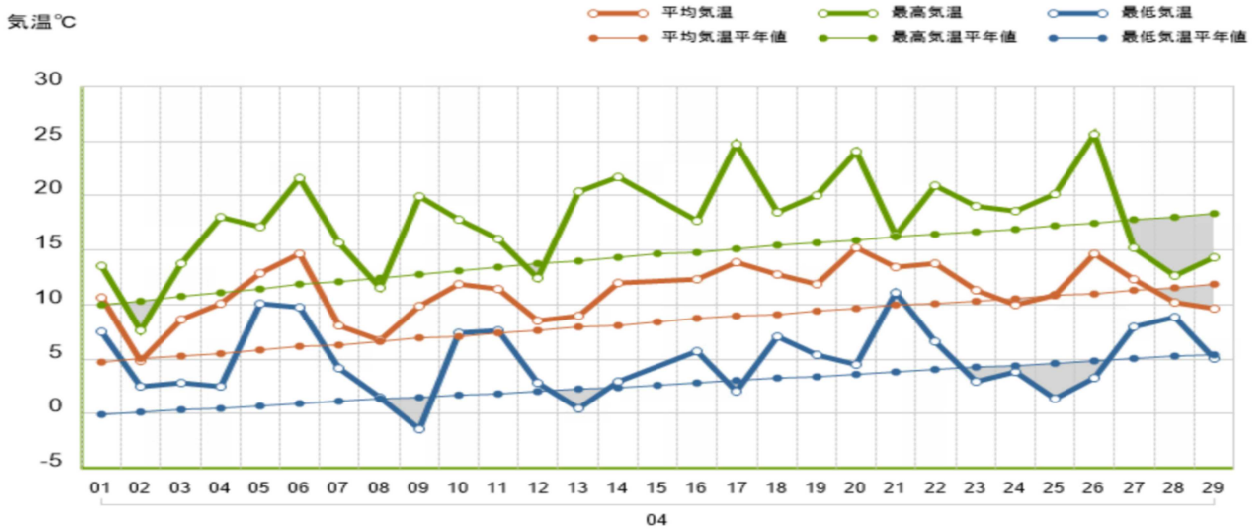
稲作だより

令和8年5月1日発行
雄勝地域振興局農林部
農業振興普及課
TEL 0183-73-5180
FAX 0183-72-6897

適正管理で健苗育成！適期移植の徹底を！

育苗日数の延長が予想される場合は
苗の徒長・老化防止対策を実施しましょう

【これまでの気象経過】（アメダス湯沢：令和8年4月1日～4月29日）



【東北地方 1か月予報】（4月23日 仙台管区气象台発表）

- ・平均気温 高い見込み（低10%、並40%、**高50%**）
- ・降水量 ほぼ平年並の見込み（少30%、並40%、多30%）
- ・日照時間 平年並か多い見込み（少20%、並40%、多40%）

【雄勝管内の作業・生育概況】

播種作業は、始期4月17日（平年より2日早い）、盛期4月24日（平年より1日早い）、終期4月30日（平年並）となりました。

この期間、天気は周期的に変化し、気温の寒暖差が大きくなりました。平年と比べ気温は高く、日照時間も多く推移したため、一部でハウス内温度の急上昇や多照による葉先やけが見られました。

【当面の主な技術対策】

1 育苗管理について

こまめな管理を心がけ、極端な低温や高温、急激な温度変化は避けましょう。

苗の生育は概ね順調となっておりますが、移植まで日数を要する場合は、下記の対策を実施し、苗の徒長・老化を防ぎ充実を図りましょう。

○育苗日数の延長が予想される場合の苗の徒長・老化防止対策

①育苗箱へのかん水は、朝方に十分に行い、かん水の回数は出来るだけ少なくしましょう。日中のかん水は、床土が白く乾き、苗がしおれる部分のみとし、午後3時過ぎはかん水は行わないようにしましょう。

②日中は換気を徹底し、移植1週間前からは夜間も積極的に外気にあてるようにしましょう。

ただし、強風時に苗に直接風が当たると乾きやすくなるため注意しましょう。

③ハウスの内側に寒冷紗等を設置し、遮光により苗周辺の温度上昇を抑えましょう。

④播種後30日（葉数3葉程度）を過ぎると、肥料切れにより苗が黄化してくるので、老化防止のため、箱当たり窒素成分で1g程度の追肥をしましょう。

⑤苗が軟弱徒長し、移植作業に支障がある場合は、剪葉を行うとともに、下葉のムレなど、苗の老化を回避しましょう。

※剪葉する場合の位置は、徒長苗の場合は第3葉の中央部とし、第4葉に傷をつけないよう、葉身の半分を残して、剪定用はさみ等で草丈15cm程度にカットします。

※剪葉した苗はいもち病が発生しやすくなるため、防除基準に従って、本田期の薬剤防除を確実に実施しましょう。

※苗が多少伸びていても、移植作業に支障がなく、しっかりした苗質であれば剪葉は不要です。

2 田植えの基本技術と田植え後の水管理について

① 適期田植え

田植えは最高気温20℃前後の温暖な日に行い、15℃以下の日は極力控えましょう。強風、低温の日は植え傷みを起こし、活着や初期生育の遅れにつながります。

② 適正な栽植密度と植付本数、植付けの深さ

安定的な生育・収量を確保するため、栽植密度は70株/坪を目安にします。株当たり植付本数が多いと初期分けつが抑制されます。植付本数は3～4本/株になるように調節しましょう。

また、極端な深植えは、活着を遅延させるため、植付けの深さは2.5cmを目安とします。

③ 田植え後～活着までの深水管理、活着後の浅水管理の実施

田植え直後は水深を4cm程度とし、保温効果を高めるため、できるだけ湛水状態を保つようにしましょう。

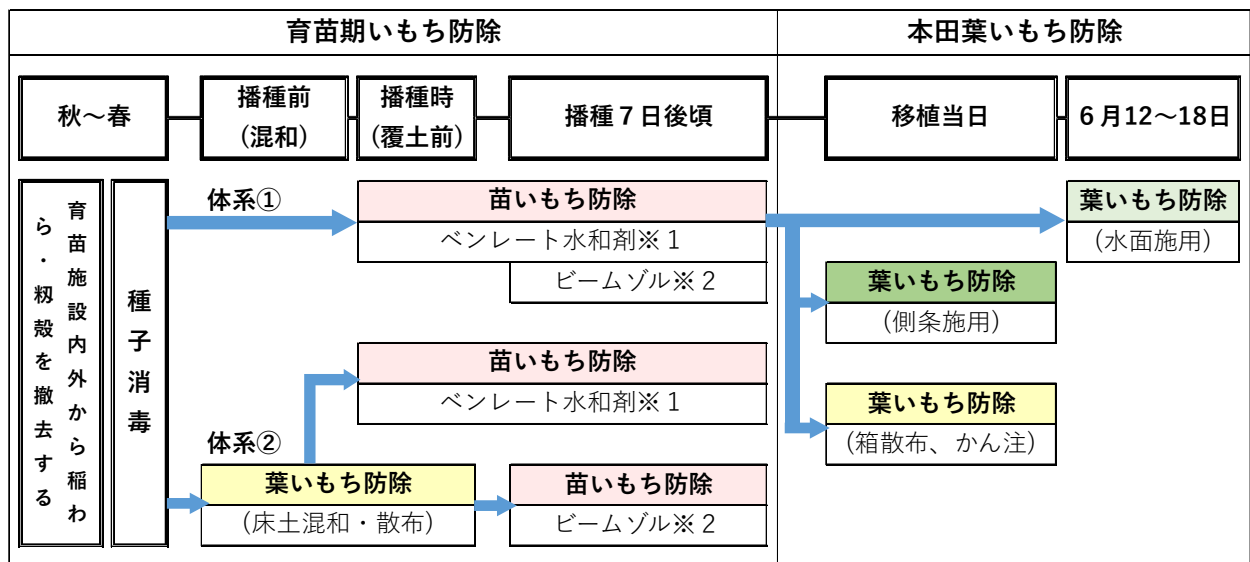
1次分けつの発生を促進し、生育初期の茎数を適正に確保するため、活着後は浅水管理とし、水温と地温を高めましょう。分けつは、昼夜の日較差（1日の最高気温と最低気温の差）を大きくすることで発生が促進されます。

入水は、用水温と水田水温の差が小さい、早朝か夜間の時間帯に実施します。

④ 異常還元（ワキ）対策

高温が続き、異常還元（ワキ）が発生した場合は、一時的に夜間の落水管理（2日間程度）を行い、根の活力維持に努めましょう。

3 いもち病対策



※1 ベンレート水和剤を500倍液500mL/箱で使用する場合、使用時期は播種時～播種14日後まで。

ベンレート水和剤を1,000倍液1L/箱で使用する場合、使用時期は播種時～播種7日後頃まで。

※2 ビームゾルの使用時期は緑化始期まで。

○本田のいもち病防除

育苗箱施用剤、側条施用剤、水面施用剤のいずれかで必ず防除を実施します。

○ 補植用余り苗の早期処分

補植用余り苗は、周辺ほ場への「いもち病」の伝染源になるため、直ちに泥に埋めて処分してください。処分が遅れると、余り苗内で感染と発病を繰り返し、気象条件が整うと一気に水田内へ伝染して、葉いもちの多発生に繋がります。

○ 余り苗や水田内で発病を確認した場合

直ちに予防剤と治療剤の混合剤（ブラシン剤またはノンブラス剤）を茎葉散布しましょう。これまでに葉いもち防除剤を使用した場合でも、速やかに茎葉散布を実施してください。その後、必要に応じてビーム剤を追加で散布します。

4 作付品種が前年と違うほ場の漏生苗対策について

- ① 除草剤散布前の代かきは、間隔を空けて2回行い、漏生苗をすき込むか、代かきから田植えまでの期間を短くします。
- ② 条間および株間にこぼれ粃から発生した稲が残った場合は、抜き取ります。
- ③ ソルネットやエリジャン等のプレチラクロールを含む初期剤を、田植え同時か田植え直後に散布します。

	-10日	-3~2日	0日	+10~14日				
パターン1	代かき①	7日間程度	代かき②	短く	田植え	初期剤	初期剤散布後10~14日 (ノビエ2葉期頃まで)	一発剤
パターン2		代かき①	短く	田植え	初期剤	初期剤散布後10~14日 (ノビエ2葉期頃まで)	一発剤	

- ※ 環境への影響と薬害防止を考慮して、初期剤は田植え後に使用します。
また、雑草の発生が多いほ場では、初期剤散布から一発剤散布までの間隔を短くします。

5 雑草対策

- ・ 除草剤の効果が十分発揮されるよう、畦塗りや、水尻の確認と補修など、漏水防止対策を確実に実施しましょう。
- ・ 除草剤によって適用雑草や使用時期の目安が異なるため、雑草の種類と発生量に応じて、適切な除草剤を選択し、組み合わせ、適期に散布しましょう。
- ・ 雑草は代かき後に発生し始めることから、代かきから移植までの期間が長くなると、除草剤の散布適期が短くなるため、作業は計画的に行いましょう。
- ・ 粒剤を使用する場合は、**散布時の水深を3~5cm**として使用しましょう。フロアブル剤、顆粒水和剤、ジャンボ剤、少量拡散型粒剤（豆つぶ、FG剤など）は、**水中での拡散性を維持するため、代かき後の田面の凹凸が少なく、散布時の水深を5~7cm確保できるほ場で**使用しましょう。
- ・ アオミドロ等の藻類や表層はく離がほ場の30%以上発生してる場合は、除草剤の拡散性が劣ることから、除草剤の散布は、藻類・表層はく離の発生前から発生初

期（ほ場の10%程度の発生）までに終わらしましょう。

- ・ 藻類や表層はく離の発生が多いほ場では、気温の低い早朝や雨の日に水の入替えを行いましょう。水管理だけで十分な効果が得られない場合は、中耕機によるかく拌や、モゲトン粒剤などのACN剤を散布しましょう。

《初期剤》	使用時期の目安	ノビエ葉齢	成分数
ピラクロン1キロ粒剤	移植時、移植後3～5日	1葉期まで	1
ソルネット1キロ粒剤	移植後3～5日	1葉期まで	
ショキニーフロアブル	移植時、移植後3～5日	1葉期まで	2
《一発剤》	使用時期の目安	ノビエ葉齢	成分数
ワザアリ1キロ粒剤	移植後5日～	2葉期まで	3
カウンスルエナジー/ カウントダウンフロアブル	移植後3日～	3葉期まで	
ジャスタ1キロ粒剤	移植後3日～	3葉期まで	
ベッカク豆つぶ250	移植後3日～	3葉期まで	
カイリキZフロアブル	移植後5日～	3葉期まで	
ディオレフロアブル	移植後5日～	3葉期まで	
アクシズMX1キロ粒剤	移植後7日～	3葉期まで	

(令和8年度版 秋田県農作物・病虫害雑草防除基準より一部抜粋)

5 育苗箱等の資材の洗浄、消毒について

もみ枯れ細菌病等の苗腐敗症の発症が見られたところでは、育苗箱や浸種おけ等の資材に病原菌が付着している可能性があります。来年度の再発を予防するため、十分に洗浄し、「イチバン」または「ケミクロンG」での消毒を確実に実施しましょう。

【「春の農作業安全運動」実施中！】

- ・ 春の農繁期となりましたが、例年この時期は農作業事故が多く発生しています。
- ・ 過去10年間の県内での農作業死亡事故は43件で、その約5割が4月から6月にかけて発生しています。
- ・ このため、県では4月20日～5月31日までを「春の農作業安全運動月間」として、農作業事故の未然防止と安全対策の徹底を呼びかけています。



農業機械に乗車する機会が多くなります。
農業機械の運転・操作にはくれぐれもご注意を！

次号の発行は6月中旬頃の予定です。